

## 幕末明治の写真師列伝 第四十一回 内田九一 その六

上野彦馬は大村の舎密試験所(長崎医学伝習所)に生徒として入所して、ポンペ、ロシェ、フォン・デン・ブルック、松本良順、吉雄圭齋らを通じて写真術を学び、その後、弟の幸馬にその写真術を伝えている。内田九一は、上野彦馬からというよりも仲の良かったこの幸馬から写真術を学んだと云った方がいいような気がする。

さて、この長崎時代、内田九一は短い間だが写真館(写場)を開業した。このことは松尾樹明(梅本貞雄)の「写真撮影場の変遷」(『アサヒカメラ』21巻3号(朝日新聞社、昭和11年3月))、松尾轟明(梅本貞雄)の「写真秘史古老達の話と諸方の記録(二)内田九一写真記(三)」(『フォトタイムス9月号』8巻9号(フォトタイムス社、昭和6年))に以下のように書かれている。

「明治写真界の大立者内田九一は、江戸に出て名を成す前、吉雄〔圭齋〕蘭医等に勸奨を受け、長崎東浜町四角、前の井上雑貨店跡で、白壁作りの土蔵中に写場を持って居たが、此所も露天写場で何も立派な西洋風写場が在った訳ではない。」「九一は、出京前に、写真館を開業して居た。それは、日本で最初の鼈甲製の写真帳を製って仏蘭西へ輸出していた東浜町の二枝商会(注：東浜町35にあった二枝美術店のこと)の近所、井上雑貨店(今は無い)の横町、川のふちにあったのである。」

ここでいう井上雑貨店とは長崎市内のどこにあったのかといえば、当時の住所で東浜町82にあった。現在の「マクドナルド長崎浜町店」(長崎市浜町7-6)がある場所である。当時の井上雑貨店の写真及び敷地を見ると土蔵は店舗の裏手の方であったようだから、おそらく内田九一の写場(写真館)は、今の「梅月堂本店」(長崎市浜町7-3)の辺りにあったのであろう。前記の「川のふち」とは、現在は暗渠になっているため見ることはできないが、現在のホテルフォルツァ長崎と「梅月堂本店」の間には無名の大溝(当時の通称は「小川」)があり、この大溝の両岸に小道があった。だから、おそらく「梅月堂本店」のある場所辺りに内田九一の露天写場があったのではないだろうかと僕は考えている。

長崎史談会編『長崎談叢』(長崎史談会、昭和9年6月、第14編)の「写真界に於ける上野彦馬の位置」によれば、「考えて見ると西の都だけでは大志を伸べる事が叶わぬので、幸馬と共に旅草鞋を履いて、苦心又苦心の末、東京に内田写真館といふ広大な建築をして、花柳界や梨園界を中心に、写真の普及を計ったのは彼の功績である。(後略)」とあり、内田九一は長崎で写真館を開業するのは諦めて、新天地を求めて長崎をあとにする。また、『故内田九一経歴』によれば、「一艘の平舟に船装いで六十余日かけて苦勞して大坂に来た」旨のことが記載されている。「慶応元年(一八六五)、彦馬の弟幸馬を連れて神戸で開業し、さらに幸馬を神戸に残し大坂船場で再開業する。ここで長州征討に向かう幕下諸藩士や大坂城での訓練の写真を撮影している。大坂町奉行大久保に仕え、帯刀を許されている。」(マリサ・ディ・ルツ、石黒敬章監修『大日本全国名所一覽』(平凡社、2001年)の巻末に記載された「九州における写真技術の導入と伝播」(姫野順一)より)

この記載からいうと慶応元年(1865)ということだが、

これは他の諸書、例えば『写真新報 第162号』(写真新報社、明治45年)の原田栗園「本邦寫眞家列傳(其十四)・故内田九一」では以下のように記載されている。

「氏既に業を卒ゆ、即ち師を辞して郷開を出で、遠く京阪の間に遊ぶ、時に慶応元年なり」

また、柴田宵曲編『幕末の武家 体験談聞書集成』(青蛙房、新装版2007年)によると、「それから私が長崎を去った後、長州征伐で將軍家の御供をして京都に逗留していおった時、或る日丸山に行く道の料理屋で飲んでおると、突然九一がやった来たから、どうして来たか聞いたら、このたび先生は御供で京都にお出でということゆえ、はるばる長崎から来た。途中は写真を写し写し上って来たとのこと。」とある。

以上のことからまとめると、内田九一は第一次長州征伐の行われた慶応元年(1865)に、上野彦馬の弟上野幸馬を連れて長崎から舟で、途中は写真を写しながら路銀を稼ぎ、まず神戸まで来てそこで写真撮影の活動を始めたようである。神戸にいたときの内田九一についてはほとんどわかってはいない。おそらくそれは後に述べるがこの神戸・大阪時代の内田九一が、わずか一年足らずしかこの神戸では活動していなかったためであろう。

この慶応時代の福原遊郭は旧湊川の堤防際、西国街道の宿場町、柳原という場所にあったようである。その後、明治元年に兵庫県の初代知事伊藤博文の県令によって、この福原遊郭は現在の現在の中央区東川崎町(JR神戸駅の南側)から宇治川にかけての湿地帯に移動する。「上野彦馬と写真にみる幕末・明治の人々」(上野一郎)によると、上野幸馬がその後、明治2年に神戸福原遊郭に写場を開いているということから、慶応時代の福原遊郭界限に、最初、内田九一も上野幸馬と一緒にいたと思われる。上野彦馬の弟、幸馬はしばらく(明治5年頃まで)新しい福原遊郭で天幕式の写真場を開業して写真を撮っていたようである。

この慶応元年の神戸時代に、内田九一、上野幸馬は市田左右太、葛城思風、森川新七、田村景美らに写真術を教えたという。この上野幸馬の新コロジオン法の新しい写真術を学ぶため、市田左右太、葛城思風、森川新七らが神戸へ来たのであろう。

「東洋日の出新聞」の「日本写真の起源」(十三)では、「大坂までいっしょだった上野幸馬が何か病気に罹ってとうとう死んでしまった」などと記載されているが、これは誤りである。これは『長井長義 長崎日記』(徳島大学薬学部長井長義資料委員会編、2002)の慶応3年1月5日、5月5日、7日、10日、11日、14日、6月15日に「小先生」(上野幸馬のこと)の記述があることから、上野幸馬が、慶応3年に再び長崎の上野彦馬の元へ戻っていることが確認できるからだ。おそらく、慶応元年に上野幸馬は、内田九一と一緒に、一度長崎から神戸まで行ったものの、病気になったことなどの何らかの理由で再び長崎の上野彦馬の元に戻り、明治2年になって再び神戸に出て写真館を開業したものと思われる。

(森重和雄)